

明治期日本医学校の女医養成

について

横 川 弘 蔵

近代医師法に基く女医の誕生——女医公許は、明治十八年（一八八五）三月 荻野吟（一八五一〜一九一三）の医術開業試験合格にはじまり、医育機関での女子教育は、明治十七年（一八八四）十二月 高橋瑞子（一八五〇〜一九二七）の済生学舎入学にその第一歩がしるされた。以後女医養成の系譜は、大きく関東・関西に、さらに関東は二つの系統に分けられる。関東の二系統は、いずれも明治三十四年四月、十六年間続いた済生学舎の女子教育中止を契機に設立された。(一)東京女医学校〔吉岡彌生（一八七一〜一九六〇）主宰 明治三十三年十二月 東京市麴町区飯田町四丁目に創立〕(二)女子医学研修所〔石川清忠（一八五四〜一九一四）主宰 済生学舎前期女子学生を中心として明治三十四年四月 東京市神田区三崎町二丁目東京齒科医学院内に創立〕で、更

に明治三十六年八月済生学舎廃校後の①医学温習会〔丸茂文良（一八六三〜一九〇六）主宰〕②医学研究会〔川上元治郎（一八六四〜一九一五）主宰〕——私立日本医学校③東京医学講習会〔石川清忠主宰〕——私立東京医学校〔明治三十七年四月創立 女子医学研修所を併合〕であった。一方関西は、(一)大阪慈恵医院医学校〔緒方惟準（一八四三〜一九〇九）校長 明治二十八年東区粉川町に設立 同三十五年廃校〕(二)関西医学院〔佐多愛彦（一八七一〜一九五二）校長 明治三十五年大阪市北区に創立 同四十一年廃校〕の二校があった。

私立日本医学校は、明治三十七年四月川上元治郎の医学研究会のあとをうけて医師養成を目的として磯部檢三（一八七二〜一九四九）・山根正次（一八五七〜一九二五）により創立され、正科前期（一・二年）は神田区三崎町で、後期（三・四年）は神田美土代町で各々開校した。同年七月 神田淡路町の校舎に移転、明治四十三年三月 私立東京医学校を合併吸収した。開校と同時に正科（一学年百名）の他、前期試験合格者及医師のための臨床講習会、夏期に臨時臨床講習会が設けられた。正科の入学資格は、学則によると

「年令十七年以上ノ高等小学校又ハ中学校若シクハ高等女学校ノ第二学級卒業セル者：」で開校当初より男女共学であった。明治四十五年七月 医学専門学校への昇格に伴う女子学生募集中止までの約九カ年 正科女子学生と女医証生の推移から女医養成の概要を述べる。

明治三十七年十一月から同四十五年一月までの正科在校生延べ総数(括弧内は女子)は、前期、一四七〇二名(一八二一名)、後期一四九二九名(一一六三名)で、男女比は、男子百名に対し前期一四・一名、後期八・四名で、月平均では、前期 男一六一名、女二三名、後期 男一七二名、女一五名であった。女子在籍者の実数は、機関誌「日本医学」と日本女医会の資料から概算すると三百四十余名(内留学生四名)で、総じて出席率はよく学友会(明治三十七年十月創立)委員に多く選ばれた。次いで医術開業試験の成績は、男女合計で、前期一〇二五名、後期学説一八九九名、後期実地一八八〇名の合格者を出し、そのうち女子は、各期共凡そ七〇〇八〇名で、合格者の前期は約七%、後期は約四%を女子が占めた。

昭和十一年、日本女医会評議員(会誌編輯担当)の多川

(旧姓池内)澄子(日本医学校出身)が調査・作製した先輩女医名簿(日本女医会雑誌八〇号)によって、明治十八年〜大正六年までに登録された女医を出身校別に集計すると、日本医学校一四一名・東京医学校一三名 東京女医学校一五七名 済生学舎七〇名 大阪慈恵医院医学校一四名 関西医学院一三名 外国医学校一名 であった。日本医学校・東京医学校の合計一五四名は、東京女医学校に次いで多く、年度別にみて、明治期は八二名(内東京医学校九名)で、大正六年までの大正期七二名(内東京医学校四名)より多いが、年平均では反対に明治が九名、大正が一四名となり、大正期に入り明治期の約一・五倍の率で女子登録医が誕生している。また明治三十八年から同四十三年までは日本医学校出身者で殆ど占められた。

同窓生からは日本女医界の礎を築いた多くの先達——水江(旧北村)シズ・油川太嘉・杉田つる・島峰(旧菅野)イチ・鈴木(旧石川)松枝・大貫(旧内田)セツ・風間たね・多川(旧池内)澄子等——を輩出している。これら日本医学校出身の女医の集い——日之出会が結成された。

(東京都・開業)